

リレーション'70
第5回演奏会

RYU NOGUCHI

野口 龍 | フルート |

YUI NAGAI

永井 由比 | フルート |

SHUNGO MISSÉ

三瀬 俊吾 | ヴァイオリン |

KAORI OHSUGA

大須賀 かおり | ピアノ |

PROGRAM

「室内楽'70」は1970年から10年間で20作品委嘱初演を果たした。その全委嘱作品の再演を目的に「リレーション'70」が結成され、2012年から全4回のシリーズにより、全委嘱作品の再演とさらに4曲の委嘱初演を行った。

2018年、「リレーション'70」は活動を再開し、新たな展開を始める。

渋谷区文化総合センター大和田 伝承ホール

2018年11月14日 水

| 18:30 開場 19:00 開演 |

後援

桐朋学園芸術短期大学音楽専攻同窓会「桐の音」
日仏現代音楽協会

本日は、「リレーション'70」第5回演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

1970年から1979年まで活動した「室内楽'70」(Fl. 野口龍、Vn. 植木三郎、Pf. 若杉弘、後に松谷翠)は、邦人作曲家へ計20作品を委嘱し、日本の現代音楽の礎を築きました。「リレーション'70」は、「室内楽'70」の全委嘱作品の再演を目的に結成され、2012年までの全4回の演奏会シリーズで果たし、さらに4作品の委嘱初演を行いました。

「リレーション'70」第5回演奏会を開催するにあたり、「リレーション'70」がこれまでに委嘱した作品を再演することに致しました。今回は、第1回演奏会で委嘱初演致しました、山根明季子氏の《柘榴色の曖昧な欠片》を再演致します。「リレーション'70」として演奏会を重ね、6年振りの再演になります。加えて、これまでの「リレーション'70」の演奏会では全てトリオの編成でしたが、今回はフルートデュオ、ピアノソロ、ヴァイオリンソロの作品も取り入れ、様々な編成でのプログラムとなりました。

そして、今回の新作は三瀬和朗氏に委嘱し、「リレーション'70」4人で演奏できる編成でお願い致しました。「リレーション'70」メンバー4人での演奏は初めてになります。三瀬和朗氏による珍しい編成のカルテットの新作、「リレーション'70」4人のアンサンブル、どうぞお楽しみください。

「室内楽'70」の軌跡を辿った「リレーション'70」の活動が、未来へ受け継がれていくよう、メンバー一同願っております。

リレーション'70

野口 龍

永井 由比

三瀬 俊吾

大須賀 かおり

三善晃

オマーージュ I (1970)

トリオ: 野口 / 三瀬 / 大須賀

武満 徹

2本のフルートの為のマスク (1959/60)

フルートデュオ: 野口 / 永井

山本哲也

アコーディオン (2014)

ピアノソロ: 大須賀

山根明季子

柘榴色の曖昧な欠片 (2012 リレーション'70 委嘱作品)

トリオ: 永井 / 三瀬 / 大須賀

休憩

三瀬和朗

《Ballade》 pour Flûte en sol, Flûte, Violon et Piano (委嘱新作)

カルテット: 野口 / 永井 / 三瀬 / 大須賀

鷹羽弘晃

国境のない唄 - ヴァイオリン独奏のための (2009)

ヴァイオリンソロ: 三瀬

松村禎三

アプサラスの庭 (1971/75)

トリオ: 永井 / 三瀬 / 大須賀

三善 晃 (1933～2013)

| AKIRA MIYOSHI |

東京大学文学部仏文学科在学中よりパリ音楽院に留学。平井康三郎、池内友次郎、アンリ・シャラン、レイモン・ガロワ＝モンブランに師事。《ピアノのためのソナタ》(1953)で日本音楽コンクール第1位入賞。《ピアノと管弦楽のための協奏交響曲》(1954)、《ピアノ協奏曲》(1962)、《管弦楽のための協奏曲》、《チェロ協奏曲》(1975)、《オーケストラと童声合唱のための「響紋」》(1985)、《焉歌・波摘み》(1999)で尾高賞受賞(6回受賞は最多)。フランス文化省より芸術文化勲章(オフィシエ)を授与。近代フランス音楽の影響を受けた緻密なテクスチャーによる立体的で幻想的な音響構造が特徴。途絶えることのない緊張感と透明度の高い響きは、三善作品に通底している。東京芸術大学、桐朋学園大学にて教鞭を執る。後年は、合唱、ピアノ教育などにも力を入れた。(文責：池)

武満 徹 (1930～1996)

| TORU TAKEMITSU |

幼少期を満州の大連で過ごし、小学校入学を期に帰国。作曲をほぼ独学で学ぶ。処女作《2つのレント》は評論家の山根銀二に「音楽以前である」と酷評されたが、そこにはのちに「タケミツ・トーン」と呼ばれることになる協和と不協和の狭間を揺れ動く音響美がすでにあった。1951年に、音楽家、画家、詩人たちを交えた芸術家グループ「実験工房」を立ち上げ、視覚と聴覚を統合させた斬新な作品の数々を生み出す。出世作《弦楽のためのレクイエム》(1957)に次ぎ、《弦楽のためのソン・カリグラフィ》(1958)が第2回軽井沢現代音楽祭で第1位獲得。図形楽譜を用いた《コナ》(1962)、トーン・クラスターを多用した《テクスチュアズ》(1964)など実験的な作品が連なる。尺八と琵琶とオーケストラによる《ノヴェンバー・ステップス》(1967)で世界的な名声を得るとともに、日本の作曲界に邦楽器ブームをもたらした。尾高賞を受賞した《カトレーンI》(1975)以降、それまでの武満作品にも認められた無指向的な音楽時間の構築がさらに模索される。(文責：池原舞)

オマージュ I (1970)

*Avec Toutes Mes Amitiés**à Trois Artistes*

Mr. R. NOGUCHI

Mr. S. UEKI

Mr. H. WAKASUGI

「室内楽'70」の結成を祝って、三善晃さんが、こんな素敵な曲を贈ってくださいました。今後も私どもの演奏会の開催を、いつもかざらせていただきます。

(初演時、曲目解説より)

2本のフルートの為のマスク (1959/60)

2本のフルートのための《マスク》(1959-60)は、能からインスピレーションを受けて書かれた作品で、タイトルは「能面」を暗示している。シテの仕草や佇まい、観客から見る角度によって表情が変わって見える能面のありようが、3曲からなるこの曲にも投影されている。第1曲〈Continue〉では、2本のフルートが異なる動きを見せる。一見、相容れない両者は互いに間合いをとりながら、しかし一定の緊張感を保ち続ける。こうした構造は、「続ける」という意味のサブタイトルに合致していよう。一転して、第2曲〈Incidental I〉では、2本のフルートがまるでシンメトリーを描くかのように同期する。こうして作り出される幻想的な鏡の世界は、能面の二重性を象徴している。第3曲〈Incidental II〉においても〈I〉と同様に、2つの楽器は対置されている。だが、より自由な時間軸に音は放たれる。「付随的な」という意の他に「偶発的な」という意味ももつサブタイトルは、《弦楽のためのレクイエム》(1957)について武満が語った、彼の美学を端的に表す次の言葉と呼応するだろう。「はじまりもおわりもさだかではない。人間とこの世界をつらぬいている音の河の流れの或る部分を、偶然にとりだしたものの」。(文責：池原舞)

山本 哲也

| TETSUYA YAMAMOTO |

1989年長野県生まれ。国立音楽大学、同大学院を修了後に渡仏、マルセイユ地方音楽院を経て、現在リヨン国立高等音楽院に在学。これまでに作曲を川島素晴、北爪道夫、R. カンポ、P. ユレル、M. マタロンの各氏に師事している。イル = ド = フランス国立管弦楽団主催の作曲コンクール「Île de créations 2018」優勝、第38回 V. ブッキ賞国際作曲コンテストファイナリスト(2017)、第4回 E. デニソフ国際作曲コンクール第2位(2016)、第6回 A. ドヴォルザーク国際作曲コンクール第1位および特別賞(2015)、日本現代音楽協会第27回現音作曲新人賞(2010)など、国内外のコンクールや作品公募において受賞・入選を重ねている。2018年5月にはラジオフランスの番組「Création mondiale」にて、オーケストラ作品《In the circle...》を中心とした特集が放送された。日仏現代音楽協会会員。

web: <http://www.tetsuyayamamoto.net>

アコーディオン (2014)

アコーディオンの語源は「和音 accord」を名詞化したものである。ピアノを和音を奏することに特化した楽器として捉えたかったため、ピアノ独奏曲であるにも関わらずこのようなタイトルを名付けた。一言で「和音」といっても様々なキャラクターがある。例えば同時に発音させるだけでなく分散和音であったり、ある音域内の白鍵と黒鍵を全て同時に鳴らすトーンクラスターも2度の和音の集合体であると考えられる。また従来のレパートリーにも特徴的な和音が登場する作品はいくつも存在し、それらをそのまま引用したり、運動性や性格を引用したり、バリエーションを加えたり…という具合に、複数のマテリアルを媒介しながらパッチワーク的に構成した。2014年にピアニストの佐藤祐介氏からの委嘱で作曲。彼は最低音が拡張されたベーゼンドルファーのインペリアルモデルを好んで使用したため、最後の小節は一般のピアノ版とインペリアル版の2種類のエンディングが存在する。

山根 明季子

| AKIKO YAMANE |

1982年大阪生まれ。京都市立芸術大学修了。ポップな毒性をテーマに制作を続け、サントリーサマーフェスティバル、ワルシャワの秋、武生国際音楽祭、ミュージックフロムジャパン、アルスムジカ音楽祭など国内外で楽曲上演。一音一音の質感を聴き込み、状態として音を操作・注視するスタイルで、消費、幼さ等を扱い作品を制作している。

柘榴色の曖昧な欠片

(2012 リレーション'70 委嘱作品)

恋を愛と区別するとして、恋がもたらす心に負荷をかけるような、あたたかさではなく、不安定な甘さと痛さの質感を探って刻みつける試みで2012年に書いた作品。作曲の師であり当時夫であった作曲家川島素晴の舞台音楽《パリで1998—記憶と縁》(1998)から引用した素材を構造上の骨格とし、一音ごとの輪郭を様々なデコレートパーツで装飾し、解体し、柘榴色の音を基調に作品として再構築している。リレーション'70の委嘱により作曲、初演。

三瀬 和朗

| KAZUO MISSÉ |

東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。同大学院作曲科修了。作曲を石桁真礼生、末吉保雄、ピアノを伊達純、ソルフェージュ・声楽を瀬山詠子の各氏に師事。パリ・エコール・ノルマル音楽院作曲科修了。最高位ディプロマ授与。作曲を平義久氏に師事。第36回ヴィオッティ（ヴェルチェッリ）国際作曲コンクール第一位受賞。作品に、ヴァイオリン協奏曲《滄海の詩》（第18回民音現代作曲音楽祭委嘱作品）、《ル・タンプロフォン》ピアノ・ソロのための（第2回浜松国際ピアノコンクール課題曲）、《凍天の星》などがある。日本音楽コンクール、ルーマニア国際音楽コンクール、日本奏楽コンクール、などの審査員を務める。“OTOの会”会員。現在桐朋学園大学音楽学部名誉教授。

《Ballade》 pour Flûte en sol, Flûte, Violon et Piano (委嘱新作)

「室内楽'70」は、私が大学生時代から10年間楽しみにしていた演奏会であった。毎回委嘱された新作に興味を持ち、特に野口龍先生のフルートの音に憧れを持ってホールに足を運んでいた。2012年に、野口先生と新しいメンバーでリレーション'70が結成され、その5回目のコンサートで私に4人で演奏できる新作を委嘱して頂き、光栄に思っている。「譚詩曲」という訳語が充てられている《Ballade》は、「起承転結」の4部に分かれている。アルトフルートのソロから始まり、登場楽器が揃い物語を創起する1部。それを承けて、物語が進む2部。転じて新たにヴァイオリンのソロから始まり、デュオ、トリオと展開し、全員が今までと違った世界へと誘う3部。そして物語の始まりを想起させる終結部の4部。という構成とした。4つの楽器が織り成す物語を感じて頂ければとの思いで《Ballade》を創作した。会場での素晴らしい演奏を、本当に楽しみにしている。

鷹羽 弘晃

| HIROAKI TAKAHA |

2001年桐朋学園大学作曲理論学科卒業。パリ・エコール・ノルマル作曲科 Diplôme Supérieur 取得。第68回日本音楽コンクール作曲部門入選。室内楽や合唱を中心に作品多数。作品はアール・レスピラン、日本音楽集団、東京混声合唱団、Ensemble Alternance などによって演奏されている。ピアノ演奏、指揮でも活動中。NHK-FM「ピバ！合唱」のナビゲーター。アンサンブル・コンテンプラリーαメンバー。

国境のない唄 - ヴァイオリン独奏のための (2009)

2009年作曲。共にパリ留学時代を過ごした三瀬俊吾氏に献呈。日本で育った私にとって、海外に出てみて初めてこの世界には様々な民族がいることを体感した。現在も民族対立による紛争が続く地域があるが、まず互いの文化を知ろうとする姿勢を大切にしたい。この曲は、私の中の架空の様々な民族の唄、手振り、節回しといったものを並べた旅である。

京都生まれ。池内友次郎、伊福部昭に師事。《序奏と協奏的アレグロ》(1955)で第24回音楽コンクール第1位入賞。《ピアノ協奏曲第2番》(1979)で尾高賞受賞。1970年より東京芸術大学音楽学部作曲科にて教鞭を執る。代表作は、《阿知女》(1957)、《交響曲第1番》(1965)、《管弦楽のための前奏曲》(1968)、歌劇《沈黙》(1993)他。映画音楽も多数作曲。パターンのある音型を変化させながら反復させる手法、それらを層化したポリフォニックな構造などが特徴。こうした特徴は、松村の創作の根源にある“個”が集積されて“群”を成すイメージとも呼応する。松村は、仏教やヒンズー教の石仏たちが立ち並び、太い実体を形作っている様子に感銘を受けて以来、「アジア的な発想をもった、生命の根源に直結したエネルギーのある曲を書きたい」との姿勢で創作に取り組んだ。(文責：池原舞)

この曲は一年程前室内楽'70の三人の方々の委嘱を受け、今年の6月始めから11月始めにかけて作曲したものである。フルート、ヴァイオリン、鍵盤楽器による三人の奏者に限定されることが条件で、この条件は私にとってこの五ヶ月間かつて経験しなかった種類の苦しい桎梏となった。この組み合わせで私自身の世界を見付け出すために又してもフリ出しに戻ることを余儀なくされた。結果は今日お聴き下さる如きものとなった。“飛天の庭”という題名は曲の内容とは直接関係をもっていない。ただこの曲の作曲期間中私の座右にはいつもアンコールワットの中庭の写真が開かれてあった。そこではデヴァダーやアプサラスの像が靈妙な表情を湛えて千年の月日の中で踊りつづけていた。音楽作品にある限定されたイメージをもちこむのは危険だと承知し乍らも私はこの題名をつける衝動をおさえきれなかった。

(初演時、曲目解説より)



RYU NOGUCHI
野口 龍



YUI NAGAI
永井由比



SHUNGO MISSÉ
三瀬俊吾



KAORI OHSUGA
大須賀かおり

リレーション'70

「室内楽'70」は1970年から10年間で20作品委嘱初演を果たした。その全委嘱作品の再演を目的に「リレーション'70」が結成され、2012年から全4回のシリーズにより、全委嘱作品の再演とさらに4曲の委嘱初演を行った。

2018年、「リレーション'70」は活動を再開し、新たな展開を始める。

野口 龍

| RYU NOGUCHI |

桐朋学園短期大学音楽科在学中に ABC 交響楽団入団。後に日本フィルハーモニー交響楽団入団。読売日本交響楽団入団。1970 年「室内楽'70」結成。読売日本交響楽団を退団以後、独奏や室内楽に活発な活動を続けている。ことに現代音楽の分野において活躍は目覚しく、その実力は国際的レベルと評価されている。近年では、2002 年より 2006 年まで《日本の室内楽・日本のフルート作品》2 本立てのシリーズを企画、制作。特にシリーズ最後のリサイタルは、深い感銘を与えた演奏会として、各方面から絶賛を呼んだ。現在、桐朋学園芸術短期大学名誉教授、上野学園大学客員教授。「東京フルートアンサンブル・アカデミー」メンバー。2002 年第 11 回朝日現代音楽賞受賞。

三瀬 俊吾

| SHUNGO MISSÉ |

東京音楽大学卒業後、桐朋学園大学院大学修了。篠崎功子、岡山潔、藤原浜雄の各氏に師事。第 1 回横浜国際音楽コンクール弦楽器一般部門第 1 位。同コンクールより奨学金を得、パリ・エコール・ノルマル音楽院へ留学。同音楽院にて、ドゥヴィ・エルリ、原田幸一郎の両氏に師事し、マスタークラスや音楽院内での演奏会などに出演。定期的に千々岩英一氏の指導も受け、パリでソロや室内楽、新作の演奏活動も行う。2010 年帰国。各地でリサイタルを行う他、2011 年には現代音楽グループ「淡座」を結成し、現代音楽と古典落語で旗揚げ公演を行う。他に、mmm...、目黒弦楽四重奏団、オーケストラ・トリプティークなど、現在はソロや室内楽やオーケストラなど幅広く活動中。桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。

永井 由比

| YUI NAGAI |

桐朋学園大学短期大学部卒業、同専攻科、研究生修了。現代音楽コンクール競楽、東京音楽コンクール等に入選、入賞。これまでに、ISCM 国際現代音楽祭、東京室内歌劇場でのロシア公演、サントリーサマーフェスティバルでの出演など現代音楽分野で活発に活動する他、子供たちへの音楽ワークショップやアウトリーチ活動などもライフワークとしている。(財)地域創造公共ホール音楽活性化事業登録アーティスト。桐朋学園芸術短期大学専任講師。ムラマツフルートレッスンセンター講師。

大須賀 かおり

| KAORI OHSUGA |

桐朋学園大学音楽演奏学科卒業、同大学アンサンブルディプロマコース修了。第 9 回日本室内楽コンクール第 2 位。2001 年にデュオ「ROSCO」を甲斐史子 (Vn) と結成、第 5 回現代音楽演奏コンクール競楽 V 優勝、第 12 回朝日現代音楽賞、2003 年度青山バロックザール賞受賞。ソロリサイタルやオーケストラとの共演、内外の国際音楽祭への出演を重ねる傍ら、mmm...、KOHAKU (ORIGAMI)、リレーション'70 といったグループの一員としても意欲的な活動を展開してきた。多くの作曲家の作品初演や CD 録音に携わり、これまでの初演数は 300 曲を超える。ジパングレーベルより 4 枚のアルバムと楽譜集をリリース。日仏現代音楽協会、日本・フィンランド新音楽協会会員。桐朋学園芸術短期大学、東京成徳短期大学、弥栄高校芸術科非常勤講師。

web : <http://kaoriohsuga.com/>

「リレーション'70」 | 演奏会記録 |

第1回演奏会 ● 2012年12月18日(火) 19時開演 東京オペラシティ・リサイタルホール

三善 晃：オマージュ I (1970) (Fl. 野口 龍)
別宮 貞雄：朝の歌 (1975/76) (Fl. 野口 龍)
平吉 毅州：三人の奏者のための即興曲 (1970) (Fl. 永井 由比)
山根 明季子：柘榴色の曖昧な欠片 (委嘱初演) (Fl. 永井 由比)
三枝 成彰：3 + α → 4 0 4 (初演) (Fl. 永井 由比)
林 光：WONDERLAND I (1972) (Fl. 永井 由比)
松村 禎三：アプサラスの庭 (1971/75) (Fl. 野口 龍)
Vn. 三瀬 俊吾 Pf. 大須賀 かおり

第2回演奏会 ● 2013年9月8日(日) 14時開演 東京オペラシティ・リサイタルホール

三善 晃：オマージュ I (1970) (Fl. 野口 龍)
末吉 保雄：コレスポンダンスⅢ・Ⅳ(1979/80) (Fl. 野口 龍)
池辺 晋一郎：トリヴァランス I (1971) (Fl. 永井 由比)
江原 大介：ハウリング (委嘱初演) (Fl. 永井 由比)
一柳 慧：トライクローム (1975) (Fl. 永井 由比 / Tam-tam. 野口 龍)
肥後 一郎：フルートとヴァイオリンとピアノのためのテルツェット (1978) (Fl. 永井 由比)
小倉 朗：フリュート・ヴァイオリン・ピアノのためのコンポジション (1978) (Fl. 野口 龍)
Vn. 三瀬 俊吾 Pf. 大須賀 かおり

第3回演奏会 ● 2014年6月27日(金) 19時開演 東京オペラシティ・リサイタルホール

三善 晃：オマージュ I (1970) (Fl. 野口 龍)
廣瀬 量平：フルートとヴァイオリンとピアノのためのピエタ (1979) (Fl. 野口 龍)
柴田 南雄：トリムルティ (1974) (Fl. 永井 由比 / Pf.Cemb.Per. 大須賀 かおり / Electronics. 有馬 純寿)
入野 義朗：HRSのためのトリオ (1970) (Fl. 野口 龍)
渡辺 俊哉：流跡線 (委嘱初演) (Fl. 永井 由比)
八村 義夫：エリキサ (1974) (Fl. 永井 由比)
野田 暉行：バラード (1978) (Fl. 永井 由比)
Vn. 三瀬 俊吾 Pf. 大須賀 かおり

第4回演奏会 ● 2015年3月27日(金) 19時開演 東京オペラシティ・リサイタルホール

三善 晃：オマージュ I～V (Fl. 永井 由比)
浦田 健次郎：メロスⅡ (1976) (Fl. 野口 龍)
北爪 裕道：三色オペレーション (委嘱初演) (Fl. 永井 由比)
高田 三郎：五つの民族旋律 (1977) (Fl. 永井 由比)
北爪 道夫：OASIS (1972) (Fl. 永井 由比)
佐藤 敏直：三奏者のための音楽 (1977) (Fl. 野口 龍)
三善 晃：オマージュ・アン・クリスタル (1979) (Fl. 永井 由比)
Vn. 三瀬 俊吾 Pf. 大須賀 かおり